

保育者養成課程におけるピアノ指導の意義

—最近10年間の研究動向を通して—

辻 陽子 (岡山県立大学保健福祉学部)

伊東 陽 (沖縄県立芸術大学音楽学部)

安久津 太一 (岡山県立大学保健福祉学部)

要旨: 本研究は、最近10年の間に保育者養成課程のピアノ指導について発表された論文を分析し、研究動向を検証した。国立情報研究所による学術論文の検索サイト CiNii から「ピアノ指導」のキーワードで検索し、2009年から2019年までに発表された約110論文を研究方法と研究内容の2つの観点から分類した。その結果、研究方法は「授業記録」「実験」「分析」によるものが多く、研究内容は「学習内容」「学習内容の工夫」「学習の効果」が上位を占めていた。研究内容の多くが実践報告によるもので、ピアノを指導する教員についての教育の専門性などについては、論じているものは6%しかなかった。本研究では、最新の研究動向を通して、保育者養成課程のピアノ指導の意義について検討を加える。

キーワード: ピアノ指導、保育者養成、音楽教育、保育者の資質能力

1. はじめに

1-1. 保育者とピアノ

日本の音楽教育の特徴の一つとして、保育者養成課程におけるピアノ学習に関する研究が隆盛なことが挙げられる。『幼稚園教育要領』(文部科学省、2017)や『保育所保育指針』(厚生労働省、2017)では、音楽に親しみ楽しさを味わうことや、音などで表現し表現する喜びを味わうことについて記している。子どもが感じたことや考えたことを自分なりに表現するためにも「表現」は重要な教育であり、その中でも音楽による「表現」を重要な活動と位置付けている。この音楽による表現がピアノによるものだと明記されていないが、実際、日本の保育者養成課程ではピアノ学習は必須科目となっており、豊かな音楽活動を子どもたちに提供するためにピアノ演奏や弾き歌いなどピアノを通じた音楽学習に力点が置かれている。

日本の保育者養成課程において、ピアノ学習が必須科目となったことには、これまでの歴史が関係している。日本人を対象とした組織的なピアノ学習の原点は、明治12

年、海軍軍楽隊および式部寮雅楽課に遡る(武石、2009)。明治13年、アメリカの音楽教育家メーソン(Luther Whiting Mason 1818-1896)が日本に招聘されているが、その来日に合わせて10台のピアノと20冊のバイエルピアノ教本がアメリカから日本に送られている。また、武石(2009)は、『東京女子師範学校第三年報(自明治九年九月至明治十年八月)』の「器械現数表」により、明治9年11月16日東京女子師範学校附属幼稚園を開業したのに伴ってピアノ一台が添えられたものがピアノに関する最初の公の記録ではないかと推測している。すなわち、日本における公としてのピアノの出現は、幼稚園への設置によるものだったというのがこのことから推測できる。翌年の明治10年には東京女子師範学校附属幼稚園において「保育唱歌教育」が開始されている。この教育の目的は、子どもの身体的な発達や精神に与える効用、あるいは発音を正すためであったが(吉富他、2009)、しかしこの教育を成し遂げるためには楽器を演奏できる指導者が必要で

あった。そこで、世界における幼稚園の創始者であるドイツ人のフレーベル (Friedrich Wilhelm August Frobel, 1782-1852) の保育に通じ、当時唯一ピアノが弾ける人物であった松野クララ (1853-1941) を主任保母として採用したことが保育にピアノを取り入れるきっかけとなったのではないだろうか。その後の明治13年、メーソン招聘来日により音楽教育方法も確立されていき、教員養成のための伝習所において「ピアノ」は必須教科として成立していく。日本における「ピアノ学習」の歴史は、芸術家養成の前に教員養成のために始められたと理解することができる。それらの歴史があり、保育者養成課程でのピアノ学習は現在でも続いていると考えられる。

保育現場での保育者の音楽活動としては主に求められることは、例えば動物、情景を表現するような子どもの動きに合わせた表現の即興演奏や子どもたちと一緒に奏でる歌唱伴奏等が考えられる (辻他、2018)。この技術・技能を得るために、保育者養成課程の学生は保育者養成課程で、「ピアノ基礎」としてバイエルやブルグミュラーなどの楽曲を学習するピアノ実技レッスンを経てから、弾き歌いの実践の授業を受ける。おそらくほとんどの養成課程で、一年半ほどの期間をかけてこのようにピアノに取り組むと考えられるが、この一年半の期間は、学生の学習内容を考えると決して長いものではない。学生が習得すべき技術・技能の多さ、また、ピアノ経験がない学生の数が近年増加傾向にあることを考えても、この限られた時間の中でピアノに取り組むのは大変なことと考えられる。

そこでその限られた時間の中で学生にピアノを指導する立場にあるピアノ教員について本論では着目した。将来保育者となる学生に必要なと考えられるのは、音楽の知識、音楽で表現する技能、また、子どもたちとの歌の伴奏のための弾き歌いの技術や子どもたちの動きに合わせた即興演奏の技術だろう。その技術・技能をピアノ教員たちは限られた時間の中でどう習得させているのだろうか。

1-2. ピアノ教員について

岡田 (2000) は、日本のクラシック音楽教育についてクラシック音楽は神聖なものだから楽しむのはもってのほかという「禁欲主義」からなる儒教的発想と、芸術は理屈ではなく心なのだからただただ懸命に頑張るべきだという「実践信仰」による「根性主義」であり、こうした精神主義的なクラシック音楽教育のスタイルは長らく既定し続けていくだろうと述べている。また、この長らく続く既定のスタイルとは日本に限らないもので、「レッスンの現場は古くからの伝統にのっとりその貴重な伝統を守り続けることに誇りを持っている」とアメリカのピアニストでもあり教育者でもあるウェストニー (2015) もアメリカの音楽教育について述べている。実際、クラシックピアノを専門に学んできたピアニストやピアノ講師たちは、子どもの頃からピアノを第一に考え、厳しい指導を受け、絶え間ない努力をしてきた。それゆえにピアノに対して「厳しく取り組むものだ」という概念がどこかであるのは否めない。養成課程で指導をするピアノ教員も、音楽大学や教育系大学で音楽を専門的に学び同様に厳しくピアノに取り組んできた場合がほとんどだろう。だからこそ「ピアノ教員は、指導について自分自身が子ども時代から受けてきたレッスンのイメージを持っている。」 (奥、2009) ともあるように、教員は自らが受けた経験を基にピアノ指導に当たりがちなのではないだろうか。これは先述した「古くからの伝統」にも通じるものだと考える。実際、音楽専攻の学生に指導する際、自分たちが受けてきたレッスンを参考にして指導をしている場合は多いだろう。自分たちが指導されてきたような指導、すなわち音楽の高みを目指す指導である。それは技術的なものはもちろんのこと、音色の変化であったり、楽曲における箇所カ所に用いる表現の違いであったりと、楽曲を如何に完成型に持っていかかという「素晴らしい演奏力」を鍛えるための指導である。

しかし、保育者養成課程におけるピアノ指導はどうだろうか。自分たちが受けてきた厳しいレッスンを参考にして指導に取り組んでいいものだろうか。この疑問は、

筆者らが保育者養成課程でピアノ指導に取り組んだ際に湧いてきた疑問である。ウェストニー（2015）は先述した伝統については、心や体、精神にとって健全とは言えないものがあり、それにより音楽を学ぶ生徒たちのやる気を不必要に削いでいるとも指摘している。また、音楽専門で学んできたピアノ教員にとって、保育者養成課程でのピアノ実技は経験していないものだといえる。子どもたちの動きに合わせた即興演奏や、弾き歌いなどのためにピアノを学んできていないからである。それらを踏まえると先述したような自らが受けた経験を基にピアノ指導にあたるのは適していないのではないだろうか。

保育者養成課程の学生にとってのピアノは、音楽専門のピアノとは大きく異なる。学生に必要なのは、音楽専門のために必要な「素晴らしい演奏力」ではなく、将来保育者として音楽活動における「どんな事にも対応できる応用力」なのである。この応用力については吉村（2012）も必要なのは基本的なピアノ技術を基に、臨機応変に対応できるピアノの力だと述べており、それは音楽で表現する力、弾き歌いや即興演奏の事であり、演奏力を鍛える音楽専門のゴールとは全く違うものである。すなわち、ピアノ教員たちが課せられてきたピアノとは違うものだと認識しなければいけない。しかし、専門と違うからと言って安易な指導をすればいいというものでもない。演奏力を鍛えるのではない事や、例えば教材が簡単な内容だったとしても、どの学生にも等しく保育者として必要な技術・技能をピアノの授業を通して習得させなければならないのである。安易な指導の例として「間違えずに弾く」ことや、「止まらずに弾く」ことばかりに着目する指導がある。ウェストニー（2015）は、こういった短所に焦点を当て、長所をはっきり認めない指導は19世紀から近年まで続いているという。日本でも音楽専門で学んできたピアノ教員にそういう指導が多いことは否めない。そういった指導が多いのは、先生が「こう弾きなさい」といったとおりに弾けるようになるのが戦後以後の音楽教育において唯一最高の目標であり、それが日本の標準的なレッスンだったと岡田（2000）が述

べていることも原因の一つではないかと考える。しかし、これは林（2018）が述べているような、ピアノ実技授業で教則本だけをひたすらこなし教員は弾けているかどうかだけをチェックする授業方法では、保育における音楽表現活動を行う力量には達しないという考えの通りであり、間違いを正すような指導では保育者にとって重要な技術・技能習得の機会を逃す恐れがあるのである。

保育者養成課程における指導については残念ながら「このようにするべきだ」というモデルケースがあるわけではない。音楽専門のように指導法の講座なども見受けられない。また、筆者らの経験上、保育者養成課程でのピアノ指導に際して具体的な指導法の教授を受けることはなく、状況や学生個人のペースを見ながら自分たちで工夫をしていくしかないのが現状だと考えられる。ピアノ教員がその状況による、あるいは学生のペースに合わせた指導の工夫をしなかった場合には、単なるピアノ実技のテクニク的な指導にしかならないと考える。それは「教員がもし、保育者の担う重要な役割と、保育における音楽教育の大切さやピアノの意味を正しく理解していなければ教材レベルでのみ判断してしまうことになる。結果、初心者に対するその指導は音楽専門の指導を技術面でただ単に薄め優しくしただけの表面的なものになる可能性が起きてくる。あるいは逆に、進度の速い学生に対しては、専門レベルの技術レパートリーを求めるようなものになる可能性も出てくる。」と奥（2009）が述べる通りではないだろうか。日本におけるピアノ学習の始まりが、芸術家養成ではなく教員養成によるものだったという原点を振り返り、ピアノ教員は保育者養成課程のためのピアノだということを常に念頭に置いて指導にあたらなければならないと考える。

本論では、①保育者養成課程のピアノ指導とはどのようなものなのか、②現在、ピアノ教員はどのような意識を持って指導に当たっているのか、その2つのリサーチクエストをもとに、最近10年のピアノ指導についての論文を検索、分類し、研究動向を探り、検証・考察した。

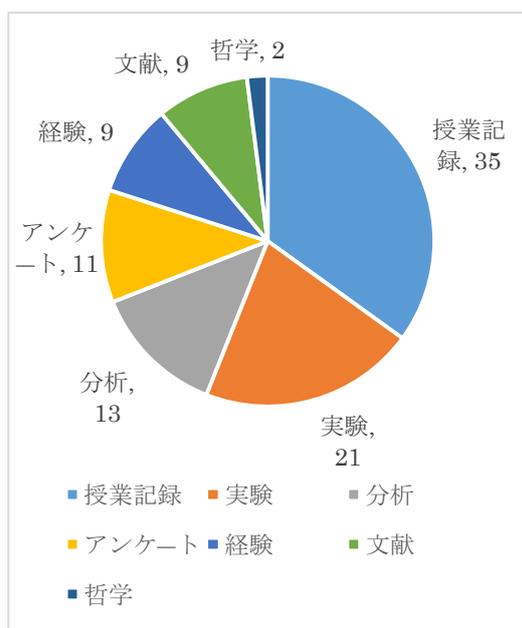
2. 方法

国立情報研究所による学術論文の検索サイト CiNii から「ピアノ指導」のキーワードで検索し、抽出された論文から最近の研究動向を検証した。

検索した結果、2009年から2019年3月までの最近10年間の150論文が抽出され（2019年5月現在）、そのうち73%にあたる約110論文が保育者養成課程のピアノ指導に関わるものだった。筆者らは安田らが2010年に発表した論文『保育におけるピアノの流行と保育者養成機関のピアノ教員の関心の在り方との関係』内にある「論文全体に占める割合」の分類を参考に、約110論文のタイトル、内容、要旨から総合的に判断し、研究方法と研究内容の二つの観点から独自に分類。更には、筆者らが共同で経験を活かして分析した。

3. 分類の結果

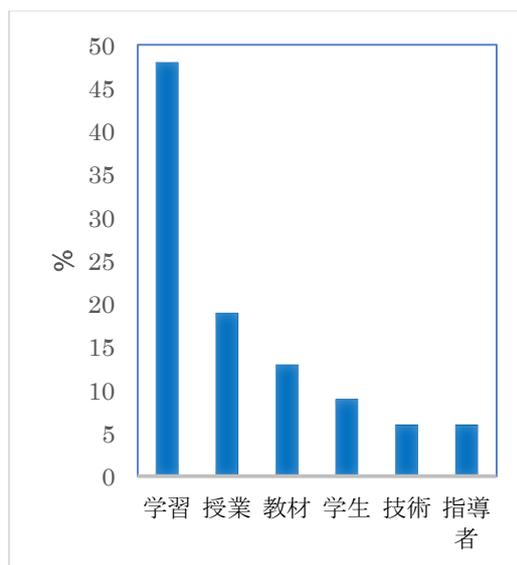
まずは約110論文がどのような方法で研究されたかについて分類した。



（図1）研究方法の分類

その結果、授業記録が圧倒的に多かった。即ちこれは、多くのピアノ教員が自分たちの指導についての実践報告をしているのである。次いで多かったのが実験だが、これはこれまでの指導とは違う新たな試みについて考察、または提案として論じてい

るものである。分析はピアノ指導に用いる楽譜の楽曲の解釈や指導法などについて論じたもの、アンケートは学生の入学以前のピアノの経験や、入学後の授業の成果などの調査したものである。経験は教員のそれまでの指導のまとめたもの、文献は過去の保育の歴史や海外の指導のメソッドなど調査したものの、哲学は思想や理論を用いて授業を展開していくことを論じたものである。

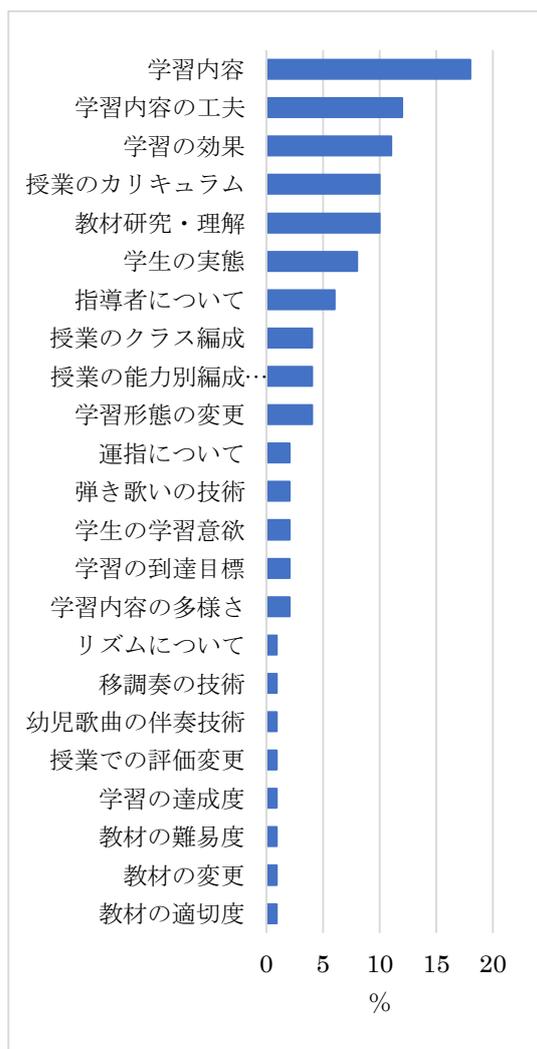


（図2）研究内容の分類①

続いて研究内容についてである。まずは内容を学習、授業、教材、学生、技術、その他で大きく分類し（図2）、グラフを作った。

学習が多いのは、研究方法（図1）の結果と同じく実践報告や、新たな試みについての考察、提案が多かったためである。授業については内容ではなく、カリキュラムや形態について述べているものである。教材は分析、学生については（図1）のアンケートによる学生自身にまつわるものであった。

（図3）はさらに細かく分類をした。やはり実践報告である「学習内容」について論じているものが一番多く、新たな試みについて考察や提案の「学習内容の工夫」、授業後の学生にどのような効果が見られたかの「学習の効果」と続く。ここまでは実践のあるなしを含めて学習の内容について論じているものが上位を占めた。



(図 3) 研究内容の分類②

次いで「授業のカリキュラム」や「授業のクラス編成」「授業の能力別編成の変更」等について、「教材研究・分析」について、アンケートによる「学生の実態」などが多く論じられている。

ここで着目したいのが「指導者について」である。グラフにすると上位7番目ではあるが、割合としては全体のわずか6%であった。学習内容や授業の形態について多く論じているにも関わらず、指導者自らについて論じているものは非常に少ないといえるだろう。中村(2014)も「研究の対象は多くの場合、保育者や学生に向けられており、保育者を指導する立場の教員に必要な音楽の能力についてまではあまり触れられていない。」と述べており、安田らも自

らの研究分類結果を検証し、「関心はほとんど学生に向かっている。反対に、教員、つまり自分たちは関心の対象になっていない。したがって、教員について保育におけるピアノ教育の専門性や適正についてはほとんど関心が払われていない。」(安田他、2010)と述べている。「指導者について」論じているものが全論文の6%という結果を見る限り、これらの意見に賛同せざるを得ないだろう。「教員は自らが受けた経験を基にピアノ指導に当たりがちではないだろうか。」と先述したのだが、この結果は自らの指導法について顧みない現れではないだろうか。

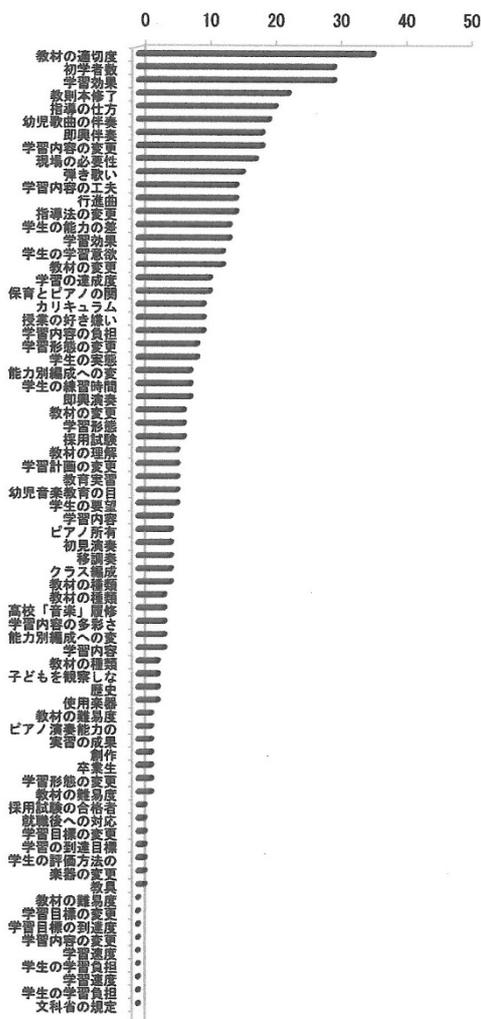
4. 過去と現在の違い

本論での研究は、『保育におけるピアノの流行と保育者養成機関のピアノ教員の関心の在り方との関係』(安田他、2010)の研究を参考に進めたものだが、ここで安田らのCiNiiから抽出された1950~1999年の107論文を対象にした研究と比較して過去と現在(図3対象)の結果の違いを検証したい。ただし、比較に際して研究方法に違いがあることを述べておく。本論の研究では「ピアノ指導」をキーワードにしているが、安田らの研究のキーワードは「保育」と「ピアノ」であること。また安田らの調査は「論文から読み取れる指導者の気持ち(関心)」についてであるが、本論の調査は「論文のテーマ」についてであること。これらの違いがあるので、比較をするといっても完全な検証には至らないが、しかし、保育者養成課程のピアノ指導に関することとして必ずしも一致しないとは言いきれないのではないだろうか。

まずは論文数についてである。安田らの研究対象である50年間で107本の論文があった。対して、本論の研究対象である最近10年間の論文数は約110論文である。

特にここ数年の発表数は目覚ましいのだが、これは再課程認定を見据えた論文発表による増加傾向だと考えられる。過去の研究が1950年からというところにも着目したい。1945年に終戦してから日本の教育は大きく変わっている。終戦まで師範学校で成されていた教員養成が、アメリカに倣って大学で担うこととなった。また1952年

に学校教育法が施行されている。すなわち、研究対象である1950年あたりというのは、保育者養成の黎明の時であると筆者らは考える。また「1970年は論文が少なく、1980年代半ばから1990年代半ばまで増加傾向が顕著になり、1990年代半ば以降から増加傾向が急速になる。」(安田他、2010)とあるが、1950~1970年に非常に少なく、後に増加していったというのは、論文というような形にする段階ではなかった黎明の時だったからではないだろうか。それらの点を踏まえても研究対象の期間と論文数の違いだけで、近年の方が多く研究されているとは安易に言い難い。



(図4) 安田による研究内容の分類

内容の比較についてであるが、安田ら(2010)の結果(図4)から「教材の適切

度」や「教材の変更」、「弾き歌い」や「即興演奏」についてのピアノの技術によるもの、「指導の仕方」や「指導法の変更」など、過去50年の間に教員たちがあらゆるものに関心を示していることが分かる。筆者らはこの結果から、過去の教員たちは指導法や使用教材、授業スタイルについて常に模索していたのではないかと推測する。この模索を基に現在の保育者養成課程の指導スタイルが築かれていったのではないだろうか。実際、現在の多くの養成課程での指導スタイルは類似していると考えられる。例えばピアノ実技を経てからの弾き歌い実践のカリキュラムや、その教材はバイエル系、ブルグミュラー「25の練習曲」(全音楽譜出版)、ソナチネアルバム(全音楽譜出版)であること、等である。

近年10年間の論文テーマの多くは先述した通り実践報告によるものである。または教材の研究・分析であったり、授業内のクラス編成の変更であったり、と基本的な指導スタイルを貫いた上での指導体制が基本だと見受けられる。すなわち、1950年から築かれてきた保育者養成課程の指導におけるスタイルを、大きく変えるという発想には至っていないといえるのではないだろうか。もちろんこの基本的な指導スタイルは決して悪いものではない。多用されている「バイエルピアノ教則本」、またはバイエルを主軸とした再編成された養成校向けの教材などについて賛否あるのは否めないが、「子どもの歌の伴奏するための前段階としてバイエルを練習しているのである、という意識を持ち取り組む。」

(林2018)という通り、シンプルな楽曲の中にある基本的なコード進行や伴奏型は演奏技術を習得しながらも音楽の知識も得ることができるとても有意義な教材だと考えられる。

しかし、だからといって既存の指導スタイルをそのまま続けていくのは是とは言えない。なぜなら、過去と現在の保育者を取り囲む環境は大きく変わってきているからである。子どもの頃に習い事としてピアノに取り組んだことのある経験者数も大きく変化している。年々、初心者数が増加傾向である。また、保育者を目指す学生の総人数も性格も大きく違うといえる。ピ

アノの授業で楽曲に取り組む姿勢一つとってもそうである。インターネットやスマートフォンの普及によりどこでも情報を得ることができ、それにより苦勞をしなくても物事を簡単にこなすことができる。例えば、新たな楽曲に取り組むとき、楽譜を読まずとも YouTube など音源を聴き、映像で弾き方を真似し、それらを丸覚えして演奏をする、いわゆる耳コピなどである。しかし、これでは読譜力は育たない。「趣味の世界では読譜をスキップし、耳コピで曲の演奏に達することも可能だが、それは職業上の力とは言えず、保育者の職責を全うすることはできない。」(越川他、2018) というように、この学習法では保育者となった時、子どもたちの音楽活動に即座に反応することは難しいだろう。齋藤(2013)も「自ら動かさずとも世界中の情報や仲間を得られる今、何事にも効率性を求め、ひたすらな努力というスタイルは通用しないと思われる学生も少しずつ見受けられるようになってきた。」と時代とともに変化していく学生の性格について述べている。筆者らが指導をしていて感じることは、昨今の学生には、今取り組んでいる学習が何に役立つかということや常々話さなければいけないということだ。そして、耳コピ等の学習法がどうして駄目なのかということも理論立てて説明しなければならない。彼らはそれがどうして駄目なのか分かっていないからである。

すなわち、ピアノ教員は、ただ学生の練習結果をチェックするというような所謂「ピアノ」の指導だけではいけないというのがこのことからよく分かる。間違いを正すこと以前に、学生の学習内容に意味を持たすことこそが大切なのである。それを踏まえた上で近年10年間の研究内容が「学習内容」などの実践報告や「教材の分析」「授業のクラス編成」等の物理的な内容について多いことは、いささか残念な偏りだと感じられる。また、指導者自身についての研究も少ないという点は先述したが、これについては時代の変化を反映してピアノ教員が指導法の改善に取り組んでいないという現れではないだろうか。これは安田ら(2010)の「この無関心は、例えば保育での子どもの音楽表現活動でピアノが

果たす機能について教員に考察が欠けている事の現れと解釈することも可能である。」という考えと通じるのではないだろうか。いずれにしても、ピアノ教員は保育者養成課程の「ピアノ」の持つ意味を再確認しなければならないと考える。

5. 結果と考察

「保育者養成課程におけるピアノ指導」の内容は何であるのか、その意義は何なのか、またそれは実践されているか、あるいは、今後どうなされていくべきかを考察するためにも先行研究や過去のデータなどを検証した結果、過去に築かれた基本的な指導スタイルを基に各教員・各大学短大で工夫されてきたが、しかしそれは時代による学生の変化を反映したような大きな変化には至っていないということ、またピアノ教員が自らの指導法には関心を払っていないということがこれまでの検証で分かった。

養成課程における「ピアノ」は、音楽専門として歩んできた教員らが取り組んできた「ピアノ」とは別物であるということである。養成課程の学生のゴールは「どんなことにも対応できる力」をつける事であり、「素晴らしい演奏」を目指す音楽専門のゴールとは違う。それは、楽曲に取り組む事について、正しく美しく止まらず弾く事も大事ではあるが、それ以上にその楽曲の持つ、例えば簡単なコード進行や終止形、歌唱伴奏の際のアレンジに用いる伴奏型の存在などについての保育者に必要な音楽の知識と実践による技術・技能習得のためなのだと、学生に学習の意味を持たさなければいけない。使用される教材は、演奏用の楽曲ではなく、保育者にとって必要な知識・技術・技能をつけるものだと、教員自身が常に認識して指導に当たらなければいけないのである。

教材に取り組みながら基礎知識やコード進行等を教え、それを弾き歌いや即興演奏などで取り込み、実践させる。その学習と実践を繰り返す。そうして習得した能力を活かすためにも、受け身の学習ではなく、学生自らに常に考えさせるよう導く。その考える力こそが応用力となり、将来保育者となった時に活かせるのではないだろう

か。その導きこそが「保育者養成課程のピアノ指導の意義」なのだと考える。

6. まとめ

本論では、保育現場における音楽の表現は重要な活動であり、そのためにも保育者養成課程の学生たちがピアノを学ぶ理由について教員養成が開始した明治時代からピアノが用いられている歴史を振り返りながら、そのピアノが保育者養成課程においてはどのような意義を持つものであるかを探るために先行研究を分類・分析し、その結果を過去のものと比較しながら現在のピアノ指導者の持つ指導の意義について考察した。

その結果、保育現場で音楽を用いた表現活動に必要な保育者のための音楽の能力は、ピアノを美しく完璧に演奏すること以上に、音楽の基礎知識や、子どもたちの歌の伴奏・子どもたちの動きに合わせた即興演奏等に即座に対応することができる応用力である。それは、ピアノ専門でやってきた教員がイメージを持つ「ピアノ」とはまた別のものである。また、注目すべき点は、先行研究の研究内容に多くあった「実践報告」や「教材の分析」、「授業の編成」についての物理的な面ばかりではない。ピアノ教員は、常に学生が目指すべき将来の姿を念頭に置いて導いていかなければならないことを忘れてはいけない。保育者養成課程の「ピアノ指導の意義」は「何」であるかということを中心に考えるべき事こそピアノ教員にとって大切なことだと考える。

《引用参考文献》

- ・青山佳代 (2016)『日本の幼稚園創設期における保育者養成、「幼稚園保姆」を要請した人物と場所に注目して』愛知江南短期大学紀要45：1-12
- ・池本美香、立岡健二郎 (2017)『保育ニーズの将来展望と対応の在り方』JRIレビュー2017 Vol.3 NO.42：37-65
- ・井上公人 (2018)『日本におけるピアノ所有の社会的意味の変容に関する分析,威信材から教材、教材から選択的贅沢趣味

- 材へ』古田和久編「2015年SSN調査報告書教育I」2015年SSM調査研究会：77-102
- ・William Westney著 (2015) 西田未緒子訳『ミスタッチを恐れるな,伸び悩みの壁を越え、演奏に生命力を取り戻す』株式会社ヤマハミュージックエンタテイメントホールディング出版部
- ・岡田暁生 (2000)『教養主義・根性主義・技術主義,近代日本の西洋音楽理解をめぐる』近代日本文化論3「ハイカルチャー」岩波書店：115-135
- ・奥千恵子 (2009)『保育者養成と演奏技法,保育士道としてのピアノ奏法』四天王寺大学紀要第48号：137-154
- ・久保田慶一 (2017)『2018年問題とこれからの音楽教育,激動の転換期をどう乗り越えるか?』株式会社ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス出版部
- ・厚生労働省 (2017)『保育所保育指針』厚生労働省第117号告示第62
- ・越川香織、高木誠 (2018)『本学におけるピアノ指導の授業設計,保育士の経験を踏まえて』千葉経済大学短期大学部研究紀要第14号
- ・鈴木みゆき、吉永早苗、志民一成、島田由紀子 (2018)『乳幼児教育・保育シリーズ保育内容 表現』光生館
- ・斎藤美和子 (2013)『保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題』人間生活学研究第4号：71-77
- ・佐藤信雄 (2007)『保育制度と保育者養成課程の変遷について,保育者養成課程における「心理学」の役割を中心にI』北海道文教大学研究紀要第31号：23-32
- ・武石みどり (2009)『明治初期のピアノ,文部省購入楽器の資料と現存状況』東京音楽大学研究紀要 (38)：1-21
- ・田中健次 (2018)『図解日本音楽史 増補改訂版』東京堂出版
- ・辻陽子、伊東陽 (2018)『保育者の資質・能力育成を見据えたピアノ学習の方法論的検討,ソナチネ及びブルグミュラーの活用』岡山県立大学教育研究紀要第3巻1号：10-1~10-10
- ・中村紗和子 (2014)『保育者養成校におけるピアノ指導に関する一考察,「音楽の要素」

「演奏の技能」を観点に指導方法の比較を通して』九州女子大学紀要第51巻2号：89-103

・林麻由美(2018)『保育現場での音楽表現活動に向けた授業展開に関する一考察,幼児の音楽表現により近づいたピアノ指導』千葉敬愛短期大学紀要(40)：291-296

・安田寛、長尾智絵(2010)『「保育におけるピアノの流行」と保育者養成機関ピアノ教員の関心の在り方との関係について』奈良教育大学紀要第59巻第1号：159-174

・吉富功修、三村真弓(2009)『幼児の音楽教育法、美しい歌声をめざして』ふくろう出版

・吉村淳子(2012)『保育者養成におけるピアノ教育についての試み,学生のアンケート調査から』新見公立大学紀要 第33巻：87-92

Abstract

**The significance of piano learning for early childhood education majors:
-An investigation of research trend for the past 10 years in Japan-**

Yoko Tsuji(Okayama Prefectural University)

Akira Ito(Okinawa Prefectural Arts University)

Taichi Akutsu(Okayama Prefectural University)

This study shows the research trends in piano instruction for nursery teacher training course by analyzing articles published within the last ten years.

CiNii, a web-based academic paper database, run by the National Institute of Informatics, retrieved approximately 110 articles published between 2009 and 2019, utilizing the search criteria ‘piano instruction’ .

The selected articles were categorized by two subjects, Research Methods and Contents of Research.

It was found that Class Records, Experiments and Analysis were used as a Research Method in most research. It was also found that Learning Content, Improvement of Learning Content and Learning Effect were the most popular Research Content.

The Research Content of the majority of the research was based on practical reports. Articles discussing the educational specialty of the piano instructor represented only 6% of the data.

In this study, we discuss the significance of piano instruction in the nursery teacher training course, as supported by the latest research trends.

Keywords : Piano instruction, early childhood education facility, music education, qualities and abilities of nursery teacher